2023（令和５）年度　福岡女子大学　一般選抜個別学力検査

〔 前期日程試験問題 〕

国際教養学科

国　語

【 90 分 】

注意事項

1　試験開始の合図があるまで，この問題冊子の中を見てはいけません。

2　問題は 4 ページから 20 ページにあります。問題は全部で**３題**です。

3　解答用紙には裏にも解答欄があります。

4　試験中に問題冊子の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は，手を挙げて監督者に知らせてください。

5　試験開始と同時に解答用紙の**受験番号欄に受験番号**を記入してください。

6　試験終了後，**問題冊子は持ち帰ってください。**

問題一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

サイードは、『オリエンタリズム』の「危機」と題されたセクションで、オリエンタリズムを形成してきた西洋人のオリエントに対する身ぶりを「テクスチュアルな姿勢」と呼んでいる。これは簡単に言えば、本に書いてある内容をそのまま現実にあてはめる態度のことである。サイードは、その例として、フランスの作家ヴォルテールの『カンディード』（一七五九）とスペインの作家セルバンテスの『ドン・キホーテ』（第一部＝一六〇四・第二部＝一六一五）を挙げている。

前者は、十八世紀の支配階級に受け容れられていたドイツの哲学者ライプニッツの楽天主義が、現実の世界ではまったく馬鹿げた思想にしかならないことを批判した小説であり、後者は、騎士道物語を読みすぎて気がふれた田舎紳士が、みずから中世の騎士になって、世の不正をただすために旅に出るすがたを揶揄[A]したパロディ文学の古典である。

これらの二つのケースに共通しているのは、それぞれの主人公が、本に書かれている理想や夢[B]をもとにして現実に立ち向かおうとした点である。サイードに言わせれば、ヴォルテールやセルバンテスにとって、「これこそ良識と思えるのは、人間とは、①群がりあふれて、予測もつかない、不確実な混乱状態のなかで生きているものなのに、それを本＝テクストに書いてあることをもとにして理解できると考えるのは、たいへんな誤りだということである」。

しかしわたしたちは、こうした「テクスチュアルな姿勢」を笑えないほど、自分たちの日常生活でもそれにとらわれている。特にマニュアル本の類は、その好例だろう。たとえばメークやファッションの雑誌、グルメのガイドブック、それにスポーツの入門書などは、かなりの人が読むばかりでなく、その内容を現実の行動に移し替えている。これは、あることを

体験する前から、本の権威を頼りにして、その体験をシミュレーションしてみる態度である。サイードは、この態度について、「生身の人間と直面して狼狽（ろうばい）するより、テクストの組織的な権威を好むのは、人間に共通する弱点と思われる」と主張している。

たしかに、あることを体験する前から、そのことをすでに知っているような錯覚に陥ったのでは、体験のインパクトは弱まるし、厳密に言えば、それでは体験から事件性（体を張って事にぶつかるという意味での生々しい出来事）を奪ってしまうことになるだろう。しかし同時に、人間は弱い生き物であって、あることをはじめて体験するときには、だれでも多かれ少なかれ不安を持つものである。サイードが「テクスチュアルな姿勢」と呼んだものが役に立つのは、まさにC そうした「危機的」状況においてである。サイードの説明では、「テクスチュアルな姿勢」が有効にはたらく状況は二種類ある。第一は、すでに少しふれたとおり、「これまであまり知られていなかったからこそ②キョウイを感じさせるもので、しかも以前は③ソエンだったものと直面するときである」。たとえば、海外旅行に行くときに、ガイドブックを読んで、そこはどういう国で、何語が話されていて、④カヘイの単位はなにで、食事や宿泊にはどれくらいかかり、見どころはどこか、といった事柄を調べておくのは、その好例だろう。

こうしてガイドブックのおかげで旅行前の不安は減るものの、それにつれて「テクスチュアルな姿勢」の弊害も浮かびあがってくる。それは、本に書かれている内容を抜きにして、なにも体験できなくなることである。たとえば、ガイドブックをもとにして旅先の自然や人間や建物を事前に知ってしまうと、わたしたちは無意識のうちに、その知識と照らし合わせて現地を「体験」することになる。つまり、「[1]→[2]」の順序が「[3]→[4]」に逆転してしまうわけである。

サイードは、その逆転現象の弊害について、こう指摘している。「多くの旅行者は、はじめて訪れた国での経験について、期待していたのとはちがったという感想をもらすが、それはあらかじめ本が教えてくれた経験とはちがったという意味である。そしてもちろん、旅行記やガイドブックの著者が本を書くのは、たいてい、あの国は『このようである』とか、さらには、あの国は『色彩に富んでいるが、高くつく、しかし面白い』とか語るためである。つまり、いずれの場合にしても、人間や場所や経験は、いつでも本で描写できると考えられていて、ついには、その本（あるいはテクスト）のほうが、それが描写している現実以上の権威と効果を獲得することになる」。

D 「テクスチュアルな姿勢」が有効にはたらく第二の状況は、第一の状況と関連して、「それで成功がもたらされたとき」、つまりそのおかげで、到底できないと思われていたことがうまく処理できたときである。サイードはその例として、ある人がライオンと遭遇したにもかかわらず、ライオンに関する本を読んでいたおかげで危険を避けられたケースを挙げている。日本なら、さしずめ「クマに会ったら、死んだふりをしろ！」といったところである。

たしかに読者というのは、「もしライオンは獰猛（どうもう）であると書かれた本を読んで、それから実際に獰猛なライオンに出くわしたとすれば、おそらく、その著者の本をもっと読みたくなり、しかもその内容を信用する気になる」だろう。そこで、ライオンに関する本に実用性があるとわかった読者は、その著者にこう頼みこむことになる。「こんどはひとつライオンの獰猛性について書いてもらえませんか？」そこで著者は、この期待に応⑤えて、新しいテーマで本を書きはじめる。サイードも言うとおり、「ライオンに関する本が獰猛なライオンのあつかい方を教えてくれて、その指示でなるほど万事うまくいったとなれば、その著者は、とても信用されるばかりでなく、やむなく他の種類の書きものにも手をソ⑥めざるをえなくなるだろう」。

こうして、ある著者の本は、読者がこれから体験することに影響を与えるが、読者がその体験をし終えると、今度は読者の体験が、著者のつぎの本の内容に影響を与える。たとえて言えば、読者が見ることになるライオンのすがたは、著者が書いたライオンのすがたをなぞり、著者がこれからライオンについて書くことは、読者が見たライオンのすがたをなぞることになる。要するに、読者は著者によってライオンの見方を規定され、著者は読者によってライオンの書き方を規定される。しかしその著者の書き方は、また読者の見方を規定し、この読者の見方は、また著者の書き方を規定して……と、このプロセスは半永久的に循環していく。その結果、たとえば「獰猛なライオンのあつかい方」から「ライオンの獰猛性」へ、そしてさらには「ライオンの獰猛性の起原」へテーマを移して、何冊もの本が出版されることになる。

このように読者と著者が影響し合っていくなかで、ライオンの「獰猛性」は空想や想像ではなくなり、読者には、ライオンが最初から「獰猛性」を実体として持っていたように思われてくる。この状況がもっと進むと、読者にとって、著者が教えてくれたライオン以外にライオンは存在しなくなり、ライオンに関する本の知識が、実物のライオンそのものにすがたを変えてしまう。

テクストの焦点が、もはやライオン全般ではなく、その獰猛性という主題にしぼられてくるにつれて、ライオンの獰猛性に対処するために推奨された方法が、実際にライオンの獰猛性を「強める」ことになり、その動物を獰猛なものに仕立てあげざるをえなくなる。というのも、それがライオンの実態であり、それこそ、わたしたちが実質としてライオンについて知っていることであり、また「それだけしか知りえない」ことだからである。（『オリエンタリズム』）

このしくみは、オリエントに関する西洋人の知識についてもあてはまる。たとえば、オリエント関係の著者とその読者は、一種の共犯関係を結びながら、オリエントに関する知識をつくりあげ、それにつれて、その知識の外側には、どんなオリエントの実態も存在しなくなり、ついにはオリエントに関する本の内容に合わせるかたちで「ほんとうのオリエント」[E]が出現することになる。

このプロセスを止めるのは、おそらく不可能だろう。一般の西洋人たちは、オリエントについて、それに関する知識が教えてくれることしか知りえないからであり、オリエントに関する知識こそが、彼らにとってのオリエントの現実を「創造」するからである（日本人の「イラク」や「北朝鮮」のイメージを考えてみよう）。しかも、この「創造」されたオリエントは、西洋人のなかに根強く残る。なぜなら、「それは専門知識を含んでいるし、さらには、学者や研究機関や政府の権威を与えられて、その実際の成果にふさわしくないほどの威信をおびることもありうる」からである。

サイードは、こうして「創造」されたオリエントの現実が、ミッシェル・フーコーの「言説」を生むと書いている。そのポイントを要約すれば、西洋人が自分たちの知識から「オリエント」をつくりあげて、それを現実の「もの」として存在させるにつれて、オリエントを表現したり理解したりする方法もシステムとして整ってくるということである。それゆえ西洋人がオリエントについて書こうとしても、結局、そのシステムの枠内でしかオリエントを表現できなくなる。その結果、ある西洋人のオリエントに関する書きものは、それを書いた「特定の作者の独創性」の産物のように見えて、じつは「言説の実体としての存在と重み」の産物にすぎないということになる。

サイードは、言説から生まれたテクストが、どれほど画一化された思考の産物であるかということについて、十九世紀の

フランスの作家フロベールの「紋切り型の観念」を借りて説明している。フロベールは『紋切型辞典』（未完）という作品のなかで、人々が無自覚に信じている「紋切り型の観念」を取りあげて、一般大衆のパターン化した思考のあり方をあばこうとした。彼が構想していたのは、「ひとたびこれを読んでしまうや、ここにある文句を自分もうっかり洩らしてしまいはせぬかと恐ろしくなり、だれも口がきけなくなる」といった辞典である。

その目的は、だれとも前もって打ち合わせをしたわけでもないのに、そしてまた、いつだれからどこで教わったかも思い出せないのに、大多数の人たちが疑いもなく、日常生活のなかで繰り返し口にしている紋切り型のことばを並べて、それらのことばの組み合わせからつくられる世界を「現実」として生きている人間の内実を本人に突きつけることだった（たとえばフロベールは、「悦楽」を「猥褻な言葉」、「愚か者」を「あなたと同じ考えをもたない人のこと」と定義している）。

サイードは、このフロベールの知恵を頼りにして、西洋人が「紋切り型の観念」を使って自分たちの「オリエント」をつくる方法を批判する。ただしサイードも認めているように、西洋人のオリエンタリズムの影響は、一般大衆よりむしろ、強い政治力をもつ人間たちに浸透していった。たとえば、フランス皇帝としてオリエントに遠征したナポレオン、フランスの外交官としてスエズ運河の完成にジンリョクしたレセップス、イギリスの政治家として広く対外政策にかかわったバルフォア、そしてイギリスの行政家としてエジプトを実質的に統治したクローマーたちである。

ある意味では、この「権力者」たちにとってこそ、オリエントに関する西洋の知識はオリエントそのものだった。たとえばナポレオンやレセップスにとって、「オリエントがあの獰猛なライオンに似て、いずれ直面して、なんらかの対抗を迫ら

れるものだったとすれば、それはひとえに、テクストがそのオリエントを存在させたからだった」。つまり西洋の権力者たちは、オリエンタリズムの言説によって、「『エジプト誌』などの作品に記述できるオリエント人たちと、レセップスがスエズ運河を切り開いたように切り開くことのできるオリエント」を与えられたのである。

これらの権力者たちが旅先や赴任先で体験することになったオリエントは、他の西洋人たちが（主に書きものをとおして）彼らのためにあらかじめ用意しておいてくれたオリエントであり、彼らは同胞たちによって「創造」されたオリエントを「発見」したり「開発」したりしたにすぎない。

他方、オリエントは「沈黙[G]したまま、ヨーロッパによるいくつものプロジェクト――原住民を巻きこみながら、彼らに対しては絶対に直接の責任を取らないプロジェクト――の実現に利用されながら、みずからのために考案されたプロジェクトやイメージや描写にさえ抵抗できなかった」。サイードは、ニーチェの用語を借りて、この西洋のプロジェクトとオリエントの沈黙との関係を「西洋の東洋に対する権力への意志の結果であり、その徴候である」と主張している。

サイードは、イギリスの劇作家ギルバートと作曲家サリバンの作品『アイオランシ』（一八八二）にある「我は我に言った、と我は言った」という文章を引用して、オリエンタリズムの言説が西洋人の「ひとりごと」としての構造を隠しもっていることを批判する。しかも、「西洋は西洋に向かってオリエントについて語った」というのがひとりごとなら、「『西洋は西洋に向かってオリエントについて語った』と西洋は語った」というのは、二重のひとりごとである。

サイードが繰り返し強調しているのは、オリエンタリズムが、こうしたひとり芝居を権力装置として、十九世紀から二十世紀にかけて、学問の分野から政治の戦略へ、そしてさらには帝国主義の制度へと変貌[9]を遂げたことである。

オリエントを単にテクスチュアルに理解し、定式化し、あるいは規定するレベルから、これらすべてをオリエントで実践するレベルへの移行が実際に起こったということであり、（この言葉を文字どおりの意味で使わせてもらえば）その「［　H　］」の移行には、オリエンタリズムが深くかかわっていたということである。（同書）

さらにサイードは、「十九世紀はオリエンタリズムの偉大な時代であり、多くの学者が⑩ハイシュツされ、西洋で教えられる言語の数も増え、写本も以前にまして編集され、翻訳され、注釈をほどこされた。しかもオリエントは往々にして、サンスクリット文法、フェニキアの古銭学、アラビア語の詩といった事柄に純粋に関心をもつ好意的なヨーロッパ人の研究者をオリエントに提供した」と認めた上で、「それでもなお、ここで絶対にはっきりさせておくべきだが、オリエンタリズムは、オリエントを蹂躙（じゅうりん）したのである」と断言している。

（難波江和英・内田樹『現代思想のパフォーマンス』による）

問一 傍線部①～⑩のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに改めなさい。

問二 傍線部Aの語句「揶揄」の読みと、意味を答えなさい。

問三 傍線部B「本に書かれている理想や夢」に該当するものとして、本文に挙げられている具体例を二つ挙げなさい。

問四 傍線部C「そうした「危機的」状況」とは、どのような状況か、答えなさい。

問五 文中の［1］［2］［3］［4］に、「知る」「見る」のうちいずれか一つ、あてはまる語を答えなさい。

問六 傍線部D「「テクスチュアルな姿勢」が有効にはたらく第二の状況」によって、どのような循環が起こると考えられているのか、説明しなさい。

問七 傍線部E「ほんとうのオリエント」とあるが、本文では「ほんとうのオリエント」のどのような点を批判しているか、説明しなさい。

問八 傍線部F「『紋切型辞典』（未完）という作品」が作られたねらいについてのサイードの考え方を、筆者はどのように指摘しているか、説明しなさい。

問九 傍線部G「沈黙」とは、どのようにしていることをいうのか、「ひとりごと」という語句を用いて、説明しなさい。

問十 文中の［H］にあてはまる最も適切な語句を、次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　朝令暮改　　イ　半信半疑　　ウ　付和雷同　　エ　竜頭蛇尾　　オ　本末転倒　　カ　東奔西走

問十一 「テクスチュアルな姿勢」についての、あなたの考えを三百字以内で書きなさい。

下書き用紙

一行二十五字

300　200　100

問題二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（ただし、設問の都合上、送り仮名、返り点などを省いたところがある。）

A 魯哀公欲二西益一レ宅。史争レ之、以為二西益一レ宅不祥一ト。哀公作レ色而怒、

B 左右数諫不レ聴。乃以問二其傅宰折睢一ニ曰、吾欲レ益レ宅而史以為二不祥一ト、

C 子以為二①何如一ト。宰折睢曰、天下有二三不祥一、西益レ宅不レ与レ焉。哀公大

D 悦而喜。頃②復問曰、何謂二三不祥一ト。対曰、不レ行二礼義一ノ

E 不祥也、嗜慾無レ止コトノ二不祥也、不レ聴二強諫一ムルヲ三不祥也。哀公黙然深念、

F 隤然自反遂不二西益一レ宅。

G ③夫史以レ争為二可一レ以止レ之、而不知不争而反取之也。

H 智者離レ路而得レ道、

愚者守道而失路。

（『淮南子』による）

注　魯……国名。
哀公、宰折睢……人名。
史……史官。記録担当の役人。
傅……守り役、教育係。
隤然……おとなしく従うさま。

問一　二重傍線部①「何如」②「復」③「夫」の読みをひらがなで答えなさい。

問二　傍線部A「怒」とあるが、なぜ怒ったのか、答えなさい。

問三　傍線部B「左右数諫不聴」を、主語が誰かを明確にして現代語訳しなさい。

問四　傍線部C「吾」とは誰か。次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　哀公　　イ　史　　ウ　宰折睢

問五 傍線部D「天下有三不祥、西益宅不与焉」の意味について、最もふさわしいものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　天下には三つの不祥が存在するが、西側に増築することは吉祥である。

イ　天下にある三不祥のうちに西側に増築することは含まれるが、大した問題ではない。

ウ　天下の不祥の中で、西側に増築することは最も不祥な三つのうちの一つである。

エ　天下には三つの不祥は存在しないが、西側に増築することは不祥といえる。

オ　天下には三つの不祥があるが、西側に増築することはそれとは関係がない。

問六 傍線部E「大悦而喜」とあるが、なぜよろこんだのか、答えなさい。

問七 波線部（あ）「問」（い）「対」の主語を、次のうちから一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　哀公　　イ　史　　ウ　宰折睢　　エ　嗜慾　　オ　不祥

問八 傍線部F「自反遂不西益宅」とあるが、なぜそうしたと考えられるか、説明しなさい。

問九 傍線部G「不知不争而反取之也」を「あらそわずしてかえってこれをとるをしらざるなり」と読むには、どのように返り点を付ければよいか。解答欄の白文に返り点を付けなさい。

問十 傍線部Hの「智者離路而得道」「愚者守道而失路」は、この話の中で、誰の、どのような行いをさして言っているのか。「智者」「愚者」にあたる人物と、該当する行いの内容について、それぞれの解答欄に答えなさい。

問題三　次の文章は『落窪物語』の一節である。中納言の娘である主人公（落窪の君）は、中納言の北の方（後妻、落窪の君の義母）にいじめられていたが、侍女たちの協力で家を脱出し、密かに少将道頼の妻となっていた。少将はその後、栄進して三位中将となった。一方、中納言家に残る北の方の実の娘の結婚はうまく行かず、落窪の君の行方は義母たちにまだ知られていない。読んで、後の問に答えなさい。

北の方、落窪のなきをねたういみじう、「いかで、くやつのためにまがまがしき気せむ」と惑ひたまふ。「我はさいはひあり、よき婿とる」と言ひしかひなく、面おこしに思ひし君は、ただあくがれにあくがる。よきわざとていそぎしたるは、世の笑はれぐさなれば、病ひ人になりぬべく嘆く。

①正月つごもりに、よき日ありけるに、物詣でする人ぞよかなるとて、三、四の君、北の方などして、車一つして、忍びて清水にまうづ。折しもこそあれ、三位中将の北の方、男君もまうでたまふに、中納言殿の車はとくまうでたまひければ、さいだち行く。忍びたりとて、ことに御前もなし。かいすみたり。中将殿は、男女おはしければ、御前いと多くて、前追ひ散らして、いと猛にてまうでたまふ。(1)さきなる車は、後ばやに越されて、人々②わびにたり。割松のすきかげに、人のあまた乗りたればにやあらむ、牛苦しげにて、え上らねば、(2)後の御車どもせかれて、とどまりがちなれば、A雑色どもむつかる。

中将の、人を呼びて、誰が車ぞと問はすれば、「中納言殿の北の方の、忍びてまうでたまへる」と言ふに、中将、うれしくまうであひにけりと、下にはをかしくおぼえて、「男ども、さきなる車、とくやれと言へ。B さるまじうは、かたはらに引きやらせよ」とのたまへば、御前の人々、「牛弱げにはべらば、えさきに上りはべらじ。かたはらに引きやりて、御車を過

ぐせ」と言へば、中将、「牛弱くは、面白の駒にかけたまへ」とのたまふ声、いと愛敬づきてよしあり。

(3)‖車にほの聞きて、「あなわびし、誰ならむ」とわび惑ふ。なほさきに立ちてやれば、中将殿の人々、「え引きやらぬ、なぞ」とて、手礫をなぐれば、中納言殿の人々、腹立ちて、「ことと言へば、大将殿ばらのやうに。中納言殿の御車ぞ。はやう打てかし」と言ふに、C この御供の雑色どもは、「D 中納言殿にも、おづる人ぞあらむ」とて、手礫を雨の降るやうに車に投げかけて、かた様に集まりて、押しやりつ。御車ども、さきだてつ。御前よりはじめて人いと多くて、うちあふべくもあらねど、片輪を堀におしつめられて、物も言はである。「なかなか無徳なるわざかな」と、いらへしたる男どもを言ふ。(4)‖

乗りたる北の方をはじめて、ねたがり惑ひて、「誰がまうでたまふぞ」と問へば、「左大将殿の三位中将殿のまうでたまふなり。ただ今の第一の人にて、あしくいらへたなり」と言ふを聞くに、北の方、「何の仇にて、とにかくに恥を見せたまふらむ。この兵部の少輔のことも、これがしたるぞかし。おいらかに、いなと言はましかば、さてもやみなまし。よそ人も、かく敵のやうなる人こそありけれ。何者ならむ」とて、E 北の方、手をもみたまふ。いと深き堀にて、③とみにえ引きあげで、とかくもて騒ぐほどに、輪少し折れぬ。いみじきわざかなとて、になひあげて、縄求め来て結ひなどして、覆らむやはとて、やうやうのぼる。

中将殿の御車どもは、梯殿に引き立てて、④無期に立ちたまへるに、やや久しうありて、からうじてよろぼひ来ぬ。「いとたけかりつる輪、折れにけりや」とて、また笑ふ。よき日にて、梯殿に隙もなければ、「かくれの方よりおりむ」と思ひて、過ぎて行く。中将、帯刀を呼びて、「この車のおり所見て告げよ。F そこにゐむ」とのたまへば、走り行きて見れば、知りたる法師よびて、「いととくまうでつるを、この三位中将とかいふ者のまうであひて、しかじかして車の輪折れて、今まで侍

りつる。局(つぼね)ありや。⑤とくおりなむ。いと苦し」と言へば、「いと不便なりけることかな。さらに、御堂の間なむ、かねて仰せられはべりしかば、とりおきてはべる。かの中将殿、いづこにかさぶらひたまはむずらむ。論なう、えせ者の、局おそひ、領(し)かれむかし。あはれ、いと不便なる夜なめりかし」と言へば、「さは、とくおりなむ。人なき局とてとられなむ」とて急げば、男一人、「御局見おかむ」とて行く後につきて、帯刀見おきて、走り帰りて、「かうかうなむ申しつる。かれが行かぬさきに」とておろす。御几帳さして、男君離れたまはず、かしづきたまふこと限りなし。

（『落窪物語』による）

注

三、四の君……中納言の北の方の実の娘。落窪の君の異母妹。

三位中将の北の方……中将の妻。落窪の君のこと。　男君……三位中将。　さいだち……先立ち。

かいすみ……人けがなく、静まりかえっているさま。　御前……通行の先払いをする従者。

割松……たいまつ。　雑色……貴族の家で、雑役や走り使いをする従者。

手礫……石つぶて。石ころ。　面白の駒、兵部の少輔……同一人物名。世間で笑い者になっている。

左大将……三位中将の父。

梯殿……京都東山の清水寺の谷の上に、橋のように掛け渡して作った建物。この寺の参詣者や、一定期間こもって祈願（参籠）する人々のための施設。

かくれの方……裏口。　帯刀……三位中将の従者の名。

局……寺の参詣者たちが、休憩や参籠に利用する部屋。

問一 波線部①～⑤の語句の意味を、本文に即して書きなさい。

①つごもり　②わびにたり　③とみにえ引きあげで　④無期に　⑤とくおりなむ

問二 文中の語「几帳」の読みをひらがなで答えなさい。

問三 二重傍線部（1）～（4）は、誰の車をさすか。次のうちから最も適切なものを一つずつ選び、記号で答えなさい。（ただし、同じ記号が重複してもよい。）

ア　中納言の北の方　イ　三位中将　ウ　兵部の少輔　エ　法師

問四 傍線部A「雑色どもむつかる」の「むつかる」とは、どのような様子か。次のうちから最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　静かに泣く　イ　文句を言う　ウ　疾走する　エ　大笑いする　オ　お世辞を言う

問五 傍線部B「さるまじうは」の意味を、「さる」の内容がわかるように説明しなさい。

問六 傍線部C「この御供の雑色ども」は、誰の車の御供か、答えなさい。

問七 傍線部D「中納言殿にも、おづる人ぞあらむ」という言葉には、どのような意図がこめられているか、説明しなさい。

問八 傍線部E「北の方、手をもみたまふ」とは、どのような心境を表している行為か、答えなさい。

問九 傍線部F「そこにゐむ」とは、誰が何のために、何をしようとしているのか、答えなさい。

問十 傍線部G「かれが行かぬさきに」の「かれ」とは何をさすか、説明しなさい。

問十一 『落窪物語』より後に成立した作品を、次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　菅家文草　イ　古今和歌集　ウ　文華秀麗集　エ　更級日記　オ　土佐日記